

風土と旅行者

Climate and Traveler

河野哲也

KONO, Tetsuya

【要旨】 和辻哲郎の『風土』は、ある土地の自然と人々の生活をあらかじめの知識によって紋切り型に捉える悪しき旅行者の視点から書かれている。和辻は、自分が旅行者であること、旅行者がある場所に置いて重要な構成要素であることを理解しなかった。他方、日野啓三は、そこに居住しているにも関わらず、東京を本質的に移動のための場所として捉えたため、東京はむしろウィルダネスとして現れる。ある場所が人間にとって他性として立ちはだかるとき、そこはウィルダネスと呼ばれる。ウィルダネスは、人間が居住によって飼いなすことのできない、習慣から生じる意味を付与することのできない無限に豊かな無意味さを持った場所である。こうした場所を人間は祝祭することでのみ迎え入れることができるのである。

キーワード 和辻哲郎, 日野啓三, ウィルダネス, 自然, 風土

1. はじめに：旅行記としての『風土』

1935年(昭和10年)に書かれた和辻の『風土』は、自ら「序言」で述べているように、1年半のヨーロッパ留学期間中の経験から生まれた。1927年、当時38歳で、京都大学の助教授であった和辻は文部省の海外留学生としてドイツ留学を命じられた。2月7日に神戸を出港した和辻は、上海、香港、シンガポール、コロンボ、そしてアラビア海を通過し、40日間に及ぶ船旅を終えてヨーロッパに到着した。『風土』で和辻は、世界の風土を3つの類型に区分する。第一は東南アジア、中国、日本などを含む「モンスーン地帯」、第二は、アラビア、アフリカ、蒙古などに広がる「砂漠地帯」、第三は、ヨーロッパに見られる「牧場地帯」。これは和辻が船でヨーロッパに向かった経路通りの順番である。和辻の留学先はベルリンであったが、ヨーロッパ滞在中、ドイツ各地はもちろんのこと、フランス、イタリア、イギリスの各地を旅行した。ヨーロッパを歩き回って感じ取った体験を、帰国後、徐々に「思想」という雑誌に発表した。

『風土』は旅行の経験から書かれている。しかし、『風土』は旅そのものを主題的に論じていない。飯塚浩二は、その土地における生産について述べていないとして『風土』を批判している¹。

それは『風土』の観察が、旅行者による観察だからである。旅行者は、その場所での生産活動に加わらない。

和辻は、『風土』のなかで、人間の存在の仕方を「それは「人」でもあるが、しかし同時に人々の結合あるいは共同態としての社会である」²と述べる。和辻は、人間が個人的かつ社会的存在であることを指摘するが、その焦点はすぐに、個人ではなく共同体へと移っていく。人間は単に過去一般を背負うのではなく、風土的過去を背負う。ここから和辻は、「人間の歴史的存在がある国土におけるある時代の人間存在となる」³と論を展開する。和辻は、「人間存在は無数の個人に分裂することを通じて種々の結合や共同態を形成する運動である」⁴と指摘しているにもかかわらず、そのあとの論述では、個人を、ある場所の歴史を担う個体として共同体の中に埋め込んでしまう。

『風土』は、和辻という旅人、旅行者によって書かれた著作である。そして、和辻によって見られた風景の中の人々は、それ場所の歴史性の中に埋め込まれて、場所と一体化されて理解される。あの風土とそこの中の人々は固定的な性質の中で絵画のように捉えられる。旅行者である和辻は、ある場所において、自らを透明な第三者としながら、その場所と人々との関係を記述する。しかし和辻自身は、その場所と向き合い、関わることはしない。『風土』に横たわる根本的な区別は居住者と旅行者の区別であり、この区別は最後まで暗黙のままに留まる。

本論では、和辻がテーマとしなかった風土にとっての重要な構成要因、旅行者を取り上げよう。とくに、人が居住するのではなく移動するための場所、あるいは、主に移動のために通過する場所を取り上げよう。それは、都市とウィルダネスである。実際に、和辻が旅行したのは、そのような場所だったのである。その二つは、旅行者の場所、観光の場所でもある。しかし、それらは、『風土』においては扱われない。たとえば、沙漠はウィルダネスであるが、和辻は沙漠を通過することについては論じない。そこで、私たちは、和辻が論じなかった風土を論じよう。それは、旅行者によるある場所への関わり方である。旅行者は、訪れた場所とどのように向き合うのだろうか。まず、以下に日野啓三の都市＝ウィルダネス論を取り上げよう。

2. 日野啓三

日野啓三は、一九七五年『あの夕陽』で第七二回芥川賞受賞し、以後、数々の文学賞を受賞した現代の日本を代表する作家である。一九二九年に東京に生まれ、五歳の時に、親に連れられ日本植民地化のソウルに渡る。大戦後、日本に戻り、新聞社で働き、韓国やベトナムの特派員をした。日野は、『抱擁』、『夢の島』、『砂丘が動くように』といった八〇年代の都市をテーマとした作品で大きな注目を浴びた。彼の作品の特徴は、日常的で当たり前の小さな東京の風景を、これまで訪れたことがないような異境の場所や宇宙の彼方の光景であるかのように描き出す点にある。日野の小説はつねに都市を扱っているにもかかわらず、環境文学やネイチャーライティングとして評価される。以下のエッセイの一節は、日野が環境文学に分類される理由の一端を示している。

都市を非人間的だという人がいる。自然にかえれ、と叫ぶ人もいる。だが、田園的牧歌的自然は、私にはどうもなまなまし過ぎる、というか、閉じこめられた狎れ合いの息苦しさを覚えてしまう。宇宙にまで開かれた気分を覚えるのは、私にとってむしろ都市の中心部だ。岩

だらけの山頂，砂漠の中に，それは通じている。…都市から廃墟のイメージを通して，いま人類は宇宙の感覚を自分たちの意識にとりこみ始めているように私には思えるのである⁵。

日野は、「都市」と「都会」を概念的に対立させる。都市と都会の違いは，人口や規模の違いではなく，人間とその場所との関係性の違いにある。人と人が出会い，人間どうしの情緒的な交流があるのが，都会である。これに対して，都市とは，東京の休日のオフィス街のような場所のことである。それは居住する場所ではない。高層オフィスが屹立するその風景は，まるで深い岩山の下を歩いているかのようなようである。緑は乏しく，土地は乾燥し，冷え冷えとしている。きびしく非人間的で，鉦物的で，無機的である。人影が消えて鉦物化した場所が「都市」である。

その反対に，日野のいう「都会」とは，農村との連続性が強い場所である。都会は巨大なムラに過ぎない。切断は都会と都市の間にこそある。都市とムラは質的に異なっている。そして，都市は不思議にも，「本来の自然」，一般に英語で「ウィルダネス」と呼んでいるものに近づく。なぜ，都市はウィルダネスに近づくのだろうか。

日野が牧歌的自然や都会において嫌ったものとは，人間化された環境であり，そこにおける人間的な意味の充溢である。環境を人間の行動のために整備することは，一定の意図や目的の下に環境を飼い慣らすことである。それゆえに，日野は，都市に見いだされる廃墟に，自然発生したかのように作られ壊される建築物たちにおいてこそ，大量に破棄されたゴミの山においてこそ，人間的な意味から解放されて「宇宙にまで開かれた気分」を感じる。日野はたまたま訪れた東京の夢の島で，絶対的なものとの邂逅を果たす。各地から廃棄物が集まり埋め立てられていくゴミの集積地で，交換価値も，使用価値も，美的価値さえ失った，意味も名前もない廃物たちの圧倒的な実在感を日野はこう感嘆する。

そんな信じ難いほど他種類の品物が，すでに商品価値も，使用価値も，磨きあげられた形や色も失い，名前さえ消えかけて，単なる廃物，物体そのものとして，明るい空間に一面に剥き出しになっているのだった。互いに全く無関係に，何の脈絡も，水面を埋めるといふ以上に何の意味もなく。だがその迫力は何と圧倒的だったろう。これほどの，荒涼と濃密な実在感を，こんなに骨身にこたえるほど感じたことがあっただろうか，とさえ思いながら，私はその散乱し積み重なる廃物の中に，一種茫然と，一種陶然と，ただ立ちつくしていた……⁶。

あらゆる意味を失ったゴミが，広大な砂漠と岩だらけの山脈と宇宙の果ての光景と重なって見えるのは，それらが，人間からの意味づけを退け，人間の目的に奉仕せず，人間の意図のもとに制御できず，飼い慣らすことができず，ときに野獣のようにコミュニケーションすらできないからである。もともと人間の目的と意図のもとに作られた人工物は，ゴミ捨て場にうち捨てられることによって，それまでの文脈や関連が剥離し，かえって物の存在の本来の無意味さをはっきりと表現するようになる。

日野は地主階級に生まれ，大きな屋敷で育った。しかし彼は，二重の意味で家を失う。第一に，彼の生まれ故郷が経済的に疲弊し，家族は自分たちの土地を手放した。その後，日野は日本統治下の韓国に移住し，少年期を彼の地で過ごす。日本が敗戦すると，日野は，自分の朝鮮半島の家と土地を失った。しかし日野は，前近代的な土地所有に対して，また，日本の植民地支配に批

判的であった。彼は、自分の二つの家に批判的だった。日野は、住む人間を縛り付ける第一の家を嫌い、力のある多くの旅行者がある場所に別の場所の意味づけを持ち込んで作り出す第二の家を嫌った。そして、自分があらゆる家を失うこと、すなわち、ホームレスになることを当然の義務として受け取った。土地を所有して、その場所を人間的に関連づけること、言い換えれば、世界を意味づけることは、日野にとって世界を貧しくすることである。日野は次のような発言をする。

いま世界に、事実の世界にも、作品の世界にも、もっともらしい脈絡と筋道をつけることは、世界を貧しくすることだ。冒瀆的なほど貧しくする。世界も人間意識ももっとむなしく豊かで、ふしぎさにみち、偶然がいきいきと輝いているのだ⁷。

日野はホームレスである。土地を自分のものとして支配することを止め、ある場所に他の場所からの記憶と文化を刻印することを嫌った。(ここに日野とエコフェミニズムとの親和性がある。)旅行者が力を持つときには、その場所は別の場所へと飼い慣らされる。しかし、孤独な力なき旅行者であるホームレスにとって、都市は飼い慣らされない場所である。それらは、既存の意味の文脈から逸脱し、絶対の存在として私たちの前に到来する。

3. ウィルダネス

ウィルダネス、これは日本の伝統文化にはない概念である。ベルクが示しているように、ヨーロッパ人が山岳などのウィルダネスに美を見いだすようになったのは一八世紀であり、中国人は同じことをすでに四世紀から行っていた⁸。日本も中国の影響の下、自然を美的に眺める態度が発達し、詩歌や絵画の題材になった。しかしこれらは、ウィルダネスではなく、文化人によって選好された一部の自然物にすぎない。動物にせよ、鳥類にせよ、昆虫や植物にせよ、それらが美的に評価する対象はあまりに限られているか、あまりに大まかにしか捕らえられていない。風景に関しても特定の場所が愛でられる。日本の古典的な自然へ美的態度には、偏愛や記号化された単純化が目につく⁹。したがって、日本の古典的な美的自然観は、現在の環境倫理学や環境美学の観点から見ると高くは評価できない。環境倫理や環境美学にとってもっとも重要な価値である生物学的多様性と自然に対する評価の多様性が根本的に欠けているからである¹⁰。特定の自然物への偏愛とそこに自分の情緒を投影する態度は、本質的には対象に関する根本的な無関心を示すものであり、自己を対象へと一方的に投影する一種の植民地主義だと言ってよいだろう。

しかしながら、ウィルダネスへの愛好が日本にまったく存在しなかったわけではない。すでに江戸後期において登山は、宗教的な修業を超えて普及していた。明治期以降、西洋の影響で、登山はさらに広まった。にもかかわらず、メイン・カルチャーにおけるウィルダネスの評価は今日まで見いだせない。これに対して、北米では、エマーソン、ソロー、ジョン・ミューア、レオポルドといった面々と続く、ウィルダネスへの美的態度とそれに結びついた自然保護活動の伝統が存在する¹¹。ウィルダネスがどのような場所かは、1964年に作られたアメリカのウィルダネス法(Wilderness Act)に従えば、以下ようになる。

人間(man)とその労働(works)が風景を占拠している地域と異なり、地球とその生命の

共同体が人間に束縛されておらず (untrammeled), 人間がそこに留まることのない訪問者 (visitor) であるような場所である。

この定義には、人間の働きから「自由である (untrammeled)」という特徴と、人間が定住していないという特徴が含まれていることに注目したい。

しかし他方で、ウィルダネスという概念は、以下のような点においてかなり以前より批判されてもきた¹²。

1. 生態学的批判：生態系はダイナミックであるにも関わらず、ウィルダネス保護は自然を同一のままに保護しようとしている。
2. 概念的批判：ウィルダネスは人間と自然を対立的に考える西洋の文化的自然観、とくに、一七世紀のピューリタンの神学の考えに依存した概念である。
3. 非存在批判：人間の活動によって乱されていない手つかずの自然など存在しない。アメリカ大陸においてウィルダネスと呼ばれる地域にも、先住民たるインディアンが居住し、利用してきた。インディアンにとっては、その場所は居住地に他ならない。
4. 価値的批判：ウィルダネスは、先住民や地元の人々の存在を無視した西洋の自民族中心主義的な価値に基づいている。あるいは、フェミニズムの観点からは、ウィルダネスは男性中心主義的価値を内包している。
5. 倫理的批判：ウィルダネス保護区を作りことによって、地元の人々や先住民にその土地を利用することを禁じてしまう。

キャリコットは、「ウィルダネス」と呼ばれる地域を保護すべきことには大いに賛成はしても、この概念そのものは問題があると指摘する。自然は変転する流動的なものであり、環境倫理の観点から見て、保護すべきは「ウィルダネス」という固定的な景観ではなく、生命の多様性 (biodiversity) であると主張する¹³。つまり批判者によれば、ウィルダネスとは、旅行者が訪れた場所を固定して眺める態度であり、そこには、自然の流動性についての理解も、またその場所に生きてきた人々への共感も欠けていたというのである。

しかしながら、それでもウィルダネスの概念は倫理的にも美的にも有意義であるという主張も数多くある¹⁴。上であげた1から5の批判に対して、ウッズは丁寧に反論している¹⁵。筆者も、ウィルダネスは人間にとって現象学的な価値、すなわち、経験する価値をもっており、そのような経験ができる場所として維持する価値があると主張したい。ウィルダネスの概念は改鑄されるべきであり、捨てられるべきではない。

ウィルダネスの経験とは、他なるものの経験である。ヴェストによれば、ワイルドであるとは、人間の意図や感情にお構いのない身勝手さ (willful), そして、制御不能性 (uncontrollable) を意味している¹⁶。あるいは、予見不可能性といってもよいだろう。とくに、孤独にウィルダネスを移動するとき、その自然の身勝手さと制御不能性、予見不可能性は際立つ。確かに、人間の活動から一切の影響を受けていない場所は、地球上にはないかもしれない。しかし、ウィルダネス法が規定しているのは、人間から「自由だ (untrammeled)」ということである。かつてバークやカントが論じた自然の「崇高 (sublime)」の美とは、無限を前にした孤独な人間の喜

びと恐怖の感情のことである。その自然の他性が露わになる場所がウィルダネスなのである。

4. 岩への敬意

カナダでネイティブの哲学を研究しているジム・チーニー (Jim Cheney) は、多くのアメリカのインディアンが、岩を、もっとも年長で、ある意味でもっとも賢い存在として、真剣に敬意を払っていることに注目する¹⁷。層をなした岩は、私たちに、太古の海をそこでの生命を私たちに思わせる。その岩は、海とその生命を刻み込んでいる。その岩は、地面の下の圧力と熱を私たちに語りかける。インディアンによれば、岩はずっと目覚めていた (watchful) ののである。

この聖なる岩の現前、岩の目覚めであり、注意深く見守る目は、ラトカ語で Inyan と呼ばれる。それは、川下では小岩や小石のなかに現れる。人間の知識は、地球と「ともに知ること」から生まれ、さまざまな物に対する倫理的態度、すなわち、敬意を通して得ることができる。このインディアンの考え方は、知識とは対象を支配し、制御することにあると考える態度からは遠い。岩の存在そのものが、その私たちへの現前が、知識の異なった秩序を生じさせるのである。

岩を敬意の対象とすることは、チーニーによれば、西洋の倫理学では考えられないことである。日本でも、宗教的崇拜の対象となる特別な聖なる岩はあったとしても、小岩や小石にまで敬意を払うこと態度は見られない。ましてや、現代の日本は、事情が西洋と異なるわけではない。チーニーは次のように論じる。「このように考えるなら、私たちは、存在そのものが神聖なものであり、人間以上のものであることを理解するようになる。人間に特有の徳は、神秘的で、より広く、より深い、より力強い、永続する母体に埋め込まれ、そこから滋養を受けていることが分かるようになる。」¹⁸ 岩の存在、その現前、その「目覚め」は、私たちの世界に対する倫理的態度にとって、もっとも根本的な最初の教師となる。それは、宇宙を考え、宇宙に配慮し、宇宙と交流し、知識の相互性へと誘う。私たちのあらゆる活動の根底にあるもの、それは世界を祭ることである。私たちが食事を取り、子どもを育て、家を建てることができるのは、豊かに織り込まれた祭典の世界のただ中においてなのである。「白人はインディアンの世界を正しく記述しようとする。これに対して、インディアンは、祭典の世界に住んでいるそれらの存在と正しい関係を結ぶことに関心を抱く。彼らは心遣いと優雅さに関心を抱く。これらの祭典の世界は、作法 (振る舞いの様式) を作りだし、その作法が今度は世界の理解の方法を作り出すのである。」¹⁹

このインディアンの自然観に、あるいは、存在論に日野は到達したのだと言えるだろう。日野は、丸の内の高層ビルの谷間で、ホームレスになることで、祭典の世界に入ることができた。人間の与えるさまざまな価値や意味、人間の支配や制御から逃れた存在は、無限の豊かさをもって祭られることを待っているのである。

5. 旅行者の風土

世界にもっともらしい脈絡と筋道をつけることは、世界を貧しくすることである。脈絡のない移動、これが旅の本質と呼ぶことができるだろう。インディアンは、居住しているにもかかわらず、なぜ、旅行者のような自然との邂逅を得ることができるのだろうか。ほとんどのインディアンの古典的な生活がノマド的であったという事実は重要であろうが、ここでは置いておこう。そ

れは、旅行者は土地を支配したり、改変したりしないことと関係するのかもしれない。自然の土地を農地に変えることは、人工に合わせて自然を作り替えることである。これに対して、狩猟採集は、自然の生産性に合わせて人工は制限される。これは、人間の生活が、捕食関係に他ならないエコロジーの一部になることである。だが、この点も置いておこう。

世界を「祭る (ceremony)」とはどういうことだろうか。それは、無限をそのまま受け止めるということである。

意味とは、関連性によって与えられる。この言葉が何を意味するかは、その言葉が埋め込まれた文脈と状況を知らなければならない。たとえば、私の持っている指輪が他人にとってはありきたりの品物であっても、私にとってそれが代え難い物であるのは、母親が大事にしていたものを形見として譲り受けたという文脈があるからである。その指輪はいわば時空間に広がった筒のような連続体であり、指輪の周囲には母親と家族を巡るエピソードが張り巡らされている。その指輪をありきたりの品として解釈するのは、その時空的連続体としての指輪を、商品評価という一切片によって現時点で切り出したときに生じてくる評価である。私と母親の関係という「全体」は、指輪という「部分」が明確になることで理解され、指輪という「部分」の意味は、私と母親の関係という「全体」のなかではじめて理解される。

全体の理解は部分の理解に依存し、部分の理解は全体の理解に依存する。この全体と部分が相互に循環的に規定する関係を、解釈学的循環と呼ぶ。しかしながら、無限はこの全体性の把握を不可能にする。私の言葉が、行いがどのような意味を持つのかは、それがオープンな無限の中に位置づけられるなら、究極的には与えられない。そこで、私たちは、自分の関わる世界を限局し、貧しくする。そうして、私たちは自分の存在に意味を与える。境域を確定し、その中のある範囲を自らの同一性にあてがおうとする。しかし、無限は私から究極的に確定した意味を奪う。こうして、私たちは自分の意味の不確定に直面するときに、世界を祭るのである。そして無限の前で、私たちは意味から自由になった喜びと恐怖を味わうのである。これが無限という全体ですらない全体に対する崇高の感情である。ウィルダネスの身勝手さや制御不能性、予見不可能性は、究極的にこの無限から来ているのだ。

ガブリエル・マルセルに倣って哲学を日記の形で表現した、アメリカの唯一と呼んでよい実存主義者であり、ウィルダネスを讃える哲学者であるヘンリー・バグビーは次のように述べる。

物たちはそれ自体の権利で存在している。物たちを畏敬の念をもって自らのうちにとどめないかぎり、この教えは分からなくなってしまう。私たちがあえてウィルダネスの境界に立たない限り、いかにして、私たちの立場が正しくありえるだろうか。いかにして、本質的な真実が私たちの心とやりとりし合うだろうか。…しかし、物たちの独立性という真実は、独立の存在者のあいだの孤立や閉塞の感覚を屈するように私たちを導くのではない。物たちの独立性は、それを客体化する思考のあり方に根拠を与えるものではないし、物たちや私たちに向けて抽象的な視点をとることに根拠を与えるものでもない。というのも、具体的には、物たちの現前を経験することはそれと完全に親密になることであり、物たちと私たちを阻害することの正反対だからである²⁰。

では、和辻の何が問題だったのだろうか。『風土』の何がいけないのだろうか。私はこう思う

のだ。『風土』は日記で書かれるべきだったと。その叙述が編集されない、終わりのない、その区切りが、疲労によって、睡眠によって、日没によって、突発事によって中断される日記の叙述によって風土を語ればよかったのだ。それは旅行そのままの経験である。旅行を表現するには、日付や場所を記して自分の経験を記述し、そのときに自分に去来する考えを記録する以外にない。起承転結を十分に考慮する時間と余裕は旅の中にはないし、資料や文献を必要とする論文など書けはしない。旅の最中に、終局地点から全体を意味づけるようなものを書くことは不可能である。そうした表現は旅のあり方と矛盾する。日記であれば、ある地域の自然と人々の歴史的な交流を、無理に一定の固定的な図式に当てはめることもなかっただろう。そして、日記には、旅行者がどのような状態であるか、くっきりと読み取ることができる。日記の筆者は、無色透明の観察主体ではありえない。あらゆる思想は日記の形でしか表現できないかもしれないのだ。

註

- 1 『飯塚浩二著作集7 人文地理学・地理学と歴史』平凡社、1976年。
- 2 『風土：人間学的考察』岩波文庫、1979年、18頁。
- 3 同上、20頁。
- 4 同上、19-20頁。
- 5 日野啓三『都市という新しい自然』読売新聞社、1988年、38-39頁。
- 6 上掲書、11頁。
- 7 上掲書、23頁。
- 8 Berque, A. 『地球と存在の哲学：環境倫理を超えて』篠田勝英訳、ちくま新書、1996年、105頁。
- 9 たとえば、『新古今和歌集』に納められた俊成卿女による歌「なき渡る雲の雁の涙さへ露おく袖の夜半のかたしき」（現代訳：空を鳴き渡る雁の涙さえ落ちて、露を置くのだろうか——夜半、独り片袖を敷いて寝ている、私の袖に）は、『古今集』の本歌取りであるが、典型的に人間中心主義的な価値の動物への投影を示している。このようなタイプの歌は、『古今』、『新古今』に数多く見られる。他方で、華厳経や道教における自然観の中に、現代の環境倫理の基礎になり得る思想を見る研究者もいる。Odin, S. "The Japanese Concept of Nature in Relation to the Environmental Ethics and Conservation Aesthetics of Aldo Leopold," *Environmental Ethics* 13 (1991): 345-360. Kagawa-Fox, M. "Environmental Ethics from the Japanese Perspective." *Ethics, Place, and Environment* 13 (2010): 57-73.
- 10 環境美学の基本概念については以下の著作を参考。Berleant, A. *The Aesthetics of Environment*. Philadelphia: Temple UP, 1992. Brady, E. *Aesthetics of the Natural Environment*. Tuscaloosa: University of Alabama Press, 2003. Carlson, A. *Nature and Landscape: An Introduction to Environmental Aesthetics*. NY: Columbia UP, 2009. Carlson, A. & Berleant, A. (Eds.) *The Aesthetics of Natural Environment*. Broadview Press, 2004. Carlson, A. & Lincott, S. (Eds.) *Nature, Aesthetics, and Environmentalism: For Beauty to Duty*. NY: Columbia UP, 2008. Persons, G. *Aesthetics & Nature*. NY: Continuum, 2008.
- 11 以下の著作を参考。Oelschlaeger, M. *The Idea of Wilderness: From Prehistory to the Age of Ecology*. New Haven & London: Yale UP, 1991. Nash, R.F. *Wilderness and the American Mind*. 5th Ed. New Haven & London: Yale UP, 2014 (first edition 1967). McKibben, B. (Ed.) *American Earth: Environmental Writing since Thoreau*. NY: Library of America. Callicott, J.B. & Nelson, M.P. *The Great New Wilderness Debate*. Athens/ London: University of Georgia Press, 1998. Nelson, M.P. & Callicott, J.B. *The Wilderness Debate Rages On: Continuing the Great New Wilderness Debate*. Athens/ London: University of Georgia Press, 2008.
- 12 ウィルダネス概念批判は、上掲のOelschlaeger (1991); Nash (2014); Callicott & Nelson (1998); Nelson & Callicott (2008)にも数多く見られるが、とくに見通しのきいた以下の論文を参考のこと。Callicott, J.B. "Contemporary Criticism of the Received Wilderness Idea." In Nelson & Callicott (2008): 355-377. Callicott, J.B. "What "Wilderness" in Frontier Ecosystems?" *Environmental Ethics* 30 (2008):

- 235-249. Woods, M. "Wilderness." *A Companion to Environmental Philosophy*. Ed. By Jamieson, D. Blackwell, 2001: 349-361. Guha, R. "Radical American Environmentalism and Wilderness Preservation: A Third World Critique." *Environmental Ethics* 11(1989): 71-83.
- 13 Callicott, J.B. "The Implication of the 'Shifting Paradigm' in Ecology for Paradigm Shifts in the Philosophy of Conservation." In Nelson & Callicott (2008): 571-600.
- 14 Gaard, G. "Ecofeminism and Wilderness." *Environmental Ethics* 19 (1997): 5-24. List, C.J. "The Virtue of Wild Leisure." *Environmental Ethics* 27 (2005): 355-373. Rolston, H.III "Valuing Wildlands." *Environmental Ethics* 7 (1985): 23-48. Wuerthner, G. Crist, E., & Butler, T. *Keeping the Wild: Against the Domestication of Earth*. Washington, D.C.: Island Press, 2014.
- 15 Woods (2001).
- 16 Vest, J.H.C. "The Philosophical Significance of Wilderness Solitude." *Environmental Ethics* 9 (1987): 303-330.
- 17 Cheney, J. "The Journey Home." *An Invitation to Environmental Philosophy*. Ed. By Weston, A. NY/Oxford: Oxford UP, 1999.
- 18 Cheney (1999): p.145.
- 19 Ibid.p.149.
- 20 Bugbee, H. *The Inward Moring: A philosophical Exploration in Journal Form*. Athen/ London: University of Georgia Press, 1999. (original 1958)